

第3章 今後の方向性（地域づくりと共生・対流の連環に向けて）

海士町では人・モノ・健康&資源を連環し、積極的に他地域と連携・交流を考えている。今回の共生・対流事業の社会実験諸活動での協働展開から、その可能性が見えてきた。様々な芽ばえがあり、育成への双方の自信も醸成された。しかし、今回の反省及び課題として、助走から1段階（ホップ）の公的支援は多様にあるが、次の2段階（ステップ）に移る際の支援が無い。それ以降（ステップ&ジャンプ）については、自立的展開を目指すべきだが、その際の躓きで挫折することが多いのも現実である。まさにその段階での柔軟な支援措置の充実が望まれるところである。

次年度以降の展開として、海士町地域づくりの柱・雇用の場の創出/魅力的な地域情報発信/ある程度のインフラ・環境整備と共生・対流システムの構築・推進を連携させることが重要なテーマである。AMA ワゴン・出前授業関連では、未来を支える人づくりに向けて、交流・教育力の育成・強化を柱にする。具体的には、より充実した出前授業を継続し、他地域との協働イベント企画開催運営、島内遊休跡地・施設有効活用への取組を図る。菜種油を原料としたECOバス全国走破、環境問題への取組をテーマとして、地方相互間繋がり情報発信活動に着手し、その原料栽培,加工可能他地域との交流連携推進などを目論む。加えて、サマースクール in 海士を契機に、仏人との交流から仏国の何処かでの交流を機にアンテナショップ展開を模索する。また、他の活動の拡充継続は勿論のこと、本年度準備不足で実践できなかった企業（従業員・会員）、シニア層（NPOシニアボランティア協会等）との社会実験にも再チャレンジする。

図3-1 離島・過疎地域“海士町”ハンディ克服/～限りなき前進、そして、確かな明日へ～

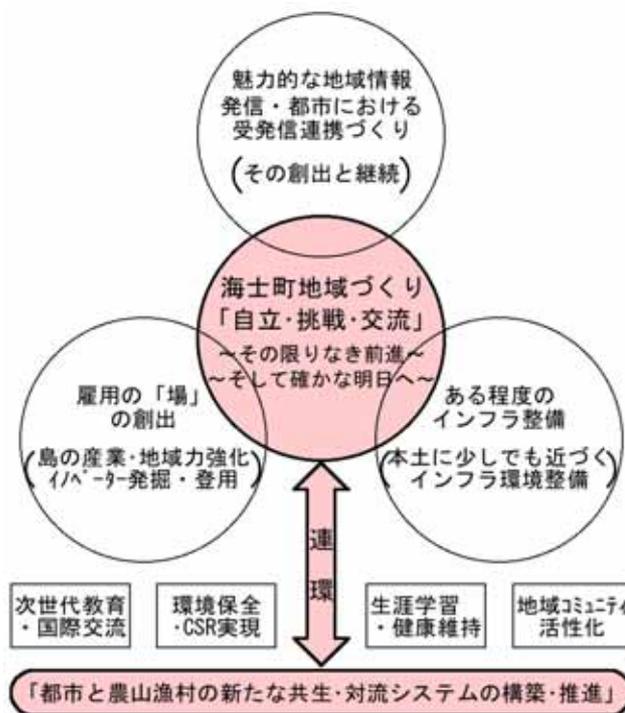
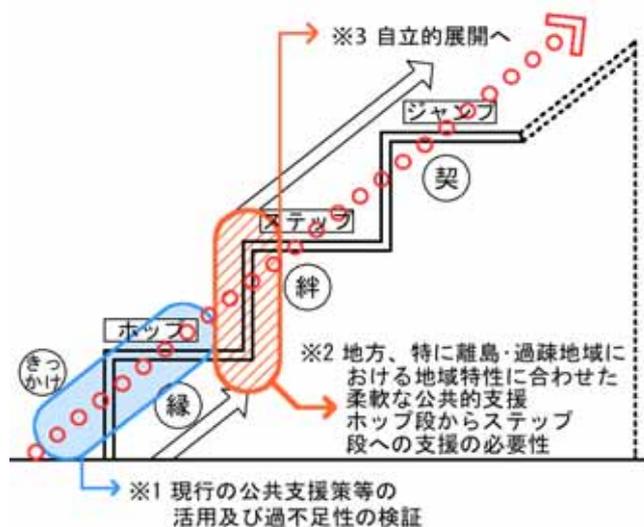
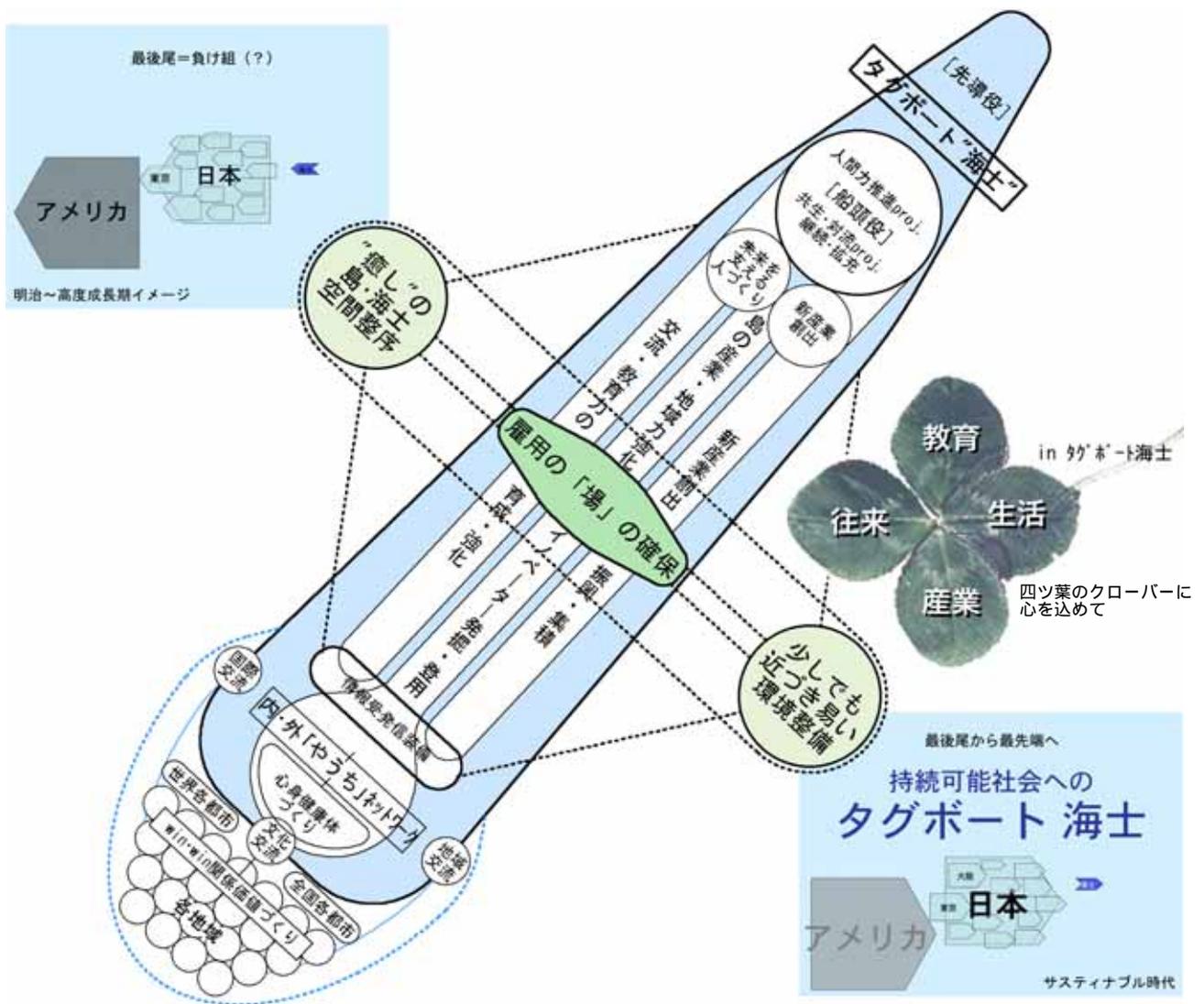


図3-2 海士町地域づくりステップアッププロセス 必要支援展開概念図 (共生・対流事業継続展開ともあわせて)



海士町での近年の取組は、「持続可能な開発の為の地域づくり・サステイナブルな町づくり」の追求にある。今までの開発とは、まったく逆の発想が鍵である。小さい者ほど勝ちやすい・大きい者に追従（最後尾）から、小さくても最先端へ。“ 辺境『海士』から日本を変える・世界を繋ぐ ” を合言葉に！！ 真にいま「持続可能社会への先導役「タグボート海士」は発進中である。

図 3-3 最後尾から最先端へ：海士町地域づくり・タグボート海士展開



最終章 振り返って、そして未来に向けて・・・・

本年度の『共生・対流事業』その社会実験の取組は、参加双方（都市・地方）期待以上の成果を得、課題も明確になったように思う。

成果の一端として、交流事業を契機に、数名の若者が海士に定住！ 4月以降、交流事業で、延べで300名の若者が海士に訪れる。地元の若者の中にも、まちづくりに積極的に参加する機運が生まれる。海士中2年生が、「わたしのふるさと海士について」と題して、弁論大会で発表し、隠岐地区で最優秀賞、県大会で島根県教育長賞受賞。そして……

参加手法とその拡大プロセスの面白さ：一橋大関ゼミが核となり、口コミ・ML（メーリングリスト）活用、全国に渡る大学生群参加の拡がりとりピーター現象

活動の波及効果と評価（新たな関係価値の捉え方）：子供たちの成長変化は勿論、地域づくりへの人々の動き・もてなし「やうち」の評価、地元若者の立ち上がり、その重要性が挙げられ、都市側への関係動機付け、人的ネットワーク形成の拡がり一層の強化獲得へと繋がる。

課題としては、離島という交通条件の克服をベースに、周知・広報の工夫・徹底、人的・財政的継続支援、民間主導への移行・転換、等が挙げられる。

今回の期待以上の成果を少なくとも3ヵ年継続、拡充発展させ、海士町地域づくりへと連環させる。その活動の中から、日本・世界が求めるタグポート海士“島は日本の明日を創る海士、ここでしかできない“島まるごと未来学校”（海と『人』・『モノ』・『健康』）づくり 『(仮称)国立人間力推進センター』設立に繋げていきたい。その展開方向としては、教育・生活・産業・往来の分野を融合させ、生活教育/産業生活/往来産業/教育往来等々をキーワードとして、研究・実証・検証・克服、その四つ葉のクローバーデザインセンターをタグポート海士に載せて、活用展開プロセスを情報発信、他地域・各都市・日本・世界に受信、連携（共生・対流）させながら先導していくことをイメージしている。

都市と農山漁村の新たな共生・対流システムの構築に関する調査：島根県海士町
～特色ある滞在型モデルの確立「島まるごと人間力向上プログラム 共創・共生社会に向けて」～

アドバイザー会議 委員名簿（敬称略：平成19年3月現在）

関 満博	一橋大学大学院商学研究科教授
尾野寛明	一橋大学大学院商学研究科院生
羽賀 慧	財団法人日本シルバーボランティアズ理事
市川松樹	NPO 法人シニアボランティアズ協会常務理事
森 恭子	学校法人江副学園新宿日本語学校教務主任
松野良子	学校法人江副学園新宿日本語学校総務主任
平岡 敬	前広島市長
平田昌由	任意団体ひらまんぼう代表
横棚美紀	任意団体ひらまんぼう
大塚幸雄	(株)バル街づくり研究所代表（本調査：総括・編集）

この会議は随時且つ個別にアドバイスを受ける形式で進める

事務局

吉元 操	海士町財政課長・人間力推進プロジェクトリーダー
宮岡健二	海士町教育委員会学校教育係長・人間力推進プロジェクト
中川 実	海士町教育委員会ふるさと振興係長・人間力推進プロジェクト

（編集協力 (株)曾根幸一・環境設計研究所）